



しょうむてんのう 聖武天皇は、なぜ大仏をつくったの



国の災いをしずめることや、人々の心を一にすることが、目的だったようだよ。

国を治めるうえで、宗教が必要だった

古代は、政治と宗教が、分けることのできない、密接な関係にあった時代です。聖武天皇が737年から、天然痘とききんへの対策として、国ごとに行かせたのは、仏像をつくる、写経（お経を写すこと）をする、国分寺を建てる、といったものでした。このことは、当時の天皇が、政治を行ううえで、宗教のもつ超自然的な力を必要としていたことを、示しています。

大仏をつくりたくなった

聖武天皇は、740年に、河内（大阪府）の智識寺に行き、盧舎那仏（毘盧遮那仏ともいう）を見て、自分もつくりたい、と思いました。天皇が、華嚴経（仏教の経典の一つ）の本尊である盧舎那仏を信仰していたこともありますが、このお寺は、民衆が、資金・材料や労力を出し合っつてつくった寺だったことも、天皇を感動させたようです。

人々の心を一にしたかったらしい

当時は、皇族と貴族の間、藤原氏とほかの貴族の間、貴族と僧の間、農民と支配者の間などの対立が、深刻な問題になっていました。聖武天皇は、鎮護国家（国の災いをしずめ、平和にすること）のための大仏をつくる、という目的だけでなく、人々の争いのエネルギーを、大仏づくりという大規模な事業に向けさせることで、人々の心を一にしたい、と思ったようです。大仏づくりにあたって、国が費用を出すだけでなく、民衆からの寄付も集めたのは、智識寺のあり方を見習ったのでしよう。

ことばの意味 天然痘 ウイルスによって、全身に吹き出物ができて化のうする感染症。